

<前回>オリエンテーション

後期：キリスト教と経済・環境

後期オリエンテーション

3. 自然神学の拡張と社会科学

4. キリスト教思想と経済・環境

4-1：キリスト教思想から見た環境と経済

4-2：聖書と環境思想

4-3：聖書と経済思想

4-4：現代神学の動向から

1：プロセス神学

2：政治神学（省略、あるいは水3の特殊講義にて講義）

3：科学技術の神学

1/22

<前回>賀川豊彦

(1) 賀川豊彦と聖書・経済・政治

A. 賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集』キリスト新聞社。

「聖書・経済・政治」関連諸論考→賀川思想全体のなかでの位置づけの問題、賀川理解の基本に関わる。

B. 賀川豊彦(1888-1960)の生涯（略年譜）

(2) 賀川豊彦の「友愛の政治経済学」

0. 賀川豊彦『友愛の政治経済学』日本生活協同組合連合会、2009年。

Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.

1. 「序文」：「今日」「キリスト教の教えが挑戦を受けている時代」、「社会での贖罪愛の適用が必要なのである」、兄弟愛をもって架橋しなければならない、「物質主義的資本主義と物質主義的共産主義は共に放棄されねばならないのである」、「心理的ないし意識的な経済を通して新しい社会秩序に至る新しい道を見出そうと試みた」

2. 「第1章 カオスからの抜け道はあるか」：「世界は混沌とした状態にある」「富はごく一握りの人々の手に集積し、社会の一般大衆は、失業、不安、従属、不信の世界に蹴落とされている」、「レッセ・フェール政策」、「今日のキリスト教会が人間の生活全体を満足させる福音を説いてはいないことを告白しなければならない」、「教会が近代において愛の実践の使命を果たしていたなら、マルクス主義が現在の規模にまで拡大するわけはなかったであろう」「日本の人々はいまなおキリスト教にたいして著しい偏見を持っている。いわゆるキリスト教国はいまなお東洋諸国を経済的・政治的に侵略しており、私たち東洋人にキリスト教国たいする古来の偏見を呼び覚ましていく」、「消費協同組合、質庫信用組合、学生信用協同組合を組織した」、「これはキリスト教的兄弟愛の実践にほかならない。日本は変わりつつある。過去2年間、私たちは宗教の復興を経験しつつある。すべての宗教に活気があり、人々のあいだに広がっている」、「日本では、キリスト教徒の数は少ないが、キリスト教の影響力は、今日、強くなってきている」、「唯物論的な共産主義とキリスト教批判に、率直に向き合わねばならない」、「私はこれらの急進的な人々のうち、キリスト者として踏みとどまった、ほとんど唯一の者である。ほとんどの人々はあれこれの理由で教会を離れていった」、「ニュー・ディールの「管理資本主義」」「資本主義は、改善された形であっても、恒久的な社会秩序に属するものではないこと」「資本主義は自由競争の原理に基づいており」、「収奪システム」、「僅かな人々の手中での資本の蓄積」「上流階級ないし有閑階級を産み出す」、「資本の集中とともに、勢力は支配階級に集中する」

3. 「第2章 キリストと経済」

「I 主の祈り」:「ある人々は、キリスト教の真の実体は全く宗教的であって、経済生活と何の関係もない、と言う」、「もちろん」「違いはある」、「しかし、キリストはそのような態度をとってはいなかった。彼はしばしば、経済の基本的な事柄を取り扱っている」
「キリストは経済について素晴らしい教えを与えてくれているのだ」

「II 価値の7要素」:「客観的世界と絶対的世界のあいだに、自然と神のあいだには、七つのチャンネルがある。生命、労働（またはエネルギー）、変化、成長、選択、秩序（または法則）、目的がそれである。これらはあらゆるタイプの経済に通じる価値の7要素である。キリスト自身が価値のこれらの七つの要素への基本を私たちに示してくれている」、
「イエスは、銀行に言及し、利潤やそれが生む利息について述べている」、「彼は、この注目すべき成長という価値原理について私たちの意識を呼び覚ます。イエスが指摘しているように、成長の法則は自然の中にある」、「変化や成長が容易に行なわれることは、資本主義文化の特徴である。しかし、単なる変化や成長は必ずしも幸福をもたらすものでも、人格の成長に貢献するものでもない」、「選択という価値の第5の要素」「選択を対象とする経済が存在してくる」「経済生活が、神の目的を成就すべき宗教生活と一致しないとき、その大切な意味を失うと、イエスは述べていたのである

「III 十字架の愛と経済の価値」:「キリストの贖罪愛は社会全体を救うための個々人の魂の救いを意味する」、「十字架の愛は経済の価値の七つの要素をすべて含む」、「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちに助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることでそれが人間の活動を要求する」、「神の呼び起こされた愛の結果」、「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「愛の可能性への信仰」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない」

「IV パウロの経済価値の観念」:「キリストは神を第1にしたが、そうすることで、経済を無視することはしなかった」、「キリストの死後、宗教的共産生活において実践に移された。パウロの13の書簡を学ぶと、初期の教会が愛他的な労働経済を実践していたことがよく分かる」

「V 贖罪愛と経済革命」

4. 「第3章 唯物論的経済観の誤り」

「I 唯物論的経済観の無力性」:「アダム・スミスによる宗教と経済の分離は一時期成功したかに見えた」、「しかし」、「宗教と経済の二つの領域は一緒になり、一体として動くのでなければならぬ」、「過去の過ち」「それは経済が人間の意識から独立していると想定し、経済学を記述的な科学として取り扱ったことであつた」、「あまりにも自然主義に傾斜したため」、「経済行為は、人間の意識の発展レベルとともに変化する、と私は信じる」、「1国の文化はそう容易には説明されない」、「単なる物質生産様式だけに基づいて文化的社会を定義しようとするのは、大きな誤りである」

「II 社会的意識の覚醒」:「プロテスタンティズムは」「資本主義的文化の勃興に道を開いたのである」

「III 心理的経済」:「自覚的な社会意識は生産と消費という二つの角度から発展してきた。経済心理の動きは、以前には夢想だにできなかった先物買いの操作を考案した」、「まだ存在しない物を取り扱うのである。貨幣の流通は人間の信用意識に依存している」

「IV 身体、感覚、意識の経済」「V 資本と労働」「VI 原始的文化の精神的基礎」

「VII 機械文明史の唯心史観」:「マルクスの唯物史観には根本的な訂正を加える必要を感じる。社会的エネルギーの表象である貨幣の力は、確かに、物質的な事柄とされてよい。

人間の貪欲として知られる心理的要因が、考えに入れられねばならない」

「VIII 宗教的価値と経済的価値の結合」：「チャールズ・ダーウィンの進化の世界はこれらの価値の七つの類型の法則を認めている」、「今日のように、人間の意識が目覚めた時代においては、人間の交換行為と人生の目的は分離され得ない」、「私たちの次の段階は「経済的価値である交換価値を宗教的にしていくこと」、「協力の経済が社会的連帯の意識に基づいていること」、「この機械文明を今一度精神化する力」

5. 「第4章 変革の哲学」

「I 暴力革命」「II 経済革命」：「人間の意識の革命」「所有権や相続や契約権と関係のある富や職業に関する理念に根本的な革命が生じなければならない。これらの考えの革命が宗教的意識に基礎づけられ、それが社会的意識を構成するまでに発展するときに、経済革命ははじめて完全に実現される」

6. 「第5章 世々を貫く兄弟愛」

「I 愛の実践」：「キリスト教史の最たる特徴は兄弟愛の展開である」、「愛餐の物語」、「愛餐は特に失業した人を助けるために企てられたものであった」「失業者を救済する義務」、「魚とパンの食事」

「II 修道会」：「6世紀以前については詳しくは分からないが、真のキリスト教的兄弟愛を明らかにする修道院との連関で、多くが保護され展開されていたこと」、「現在のセツルメントのような働き」

「III ゴシック建築とキリスト教的兄弟愛」「IV 再洗礼派の運動」「V プロテスタント自由主義」「VI キリスト教的友愛の経済実践」

7. 「第6章 現在の協同組合運動」

「I 開かれたコミュニティを」：「現代の協同組合は、中世の組合（ギルド）の延長線上に改良され発展してきた」、「中世のギルド」「その組織は非組合員にまで兄弟愛を及ぼすことはなかった」、「真の協同組合の基本原則の一つはそのサービスをコミュニティ全体へ広げることである」

「II ロジデール・システム」「III ライファンゼン・システム」「IV 日本における協同組合運動」「V 強制協同組合」「VI 協同組合運動に対する反対」

「VII 精神的運動としての協同組合」：「協働組合経営は組合員の宗教的な社会意識の目覚めに依存するであろう」、「友愛意識の復活、キリスト教的兄弟愛の復活」

8. 「第7章 兄弟愛の行動」：「I 多様な互助組織の必要性」「II 保険協同組合」「III 生産者協同組合」「IV 販売者協同組合」「V 信用協同組合」「VI 共済協同組合」「VII 利用協同組合」「VIII 消費協同組合」

9. 「第8章 協同組合国家」

「I 協同組合国家の精神的基盤」：「友愛意識の覚醒の程度」、「贖罪愛の精神的基盤がない限り、成功の可能性はほとんどない」

「II 協同組合国家」「III 協働組合連盟」「IV 産業議会」「V 社会議会」「VI 内閣」「VII 選挙」「VIII 警察制度」「IX 資本主義から協同組合へ」「X 私有と個人企業」「XI 慈善と教育」

10. 「第9章 友愛に基づく世界平和」

「I 戦争の原因となる経済」：「最近の農業不況の原因は、食物の生産過剰によるものであった」、「世界列強がよき隣人国として共に手を結ぶならば、人類が飢えるような事は決してないであろう。誠に残念なことであるが」

「II ロイド海上保険協会を見よ」「III 協同組合貿易と世界平和」「IV 国際経済会議」「V 国際協同組合」「VI 結論」：「世界の経済体制を「協同組合化」する努力をいまずぐ始めよう」

4 - 4 : 現代神学の動向から

1 : プロセス神学

A. 導入

「4 - 1 : キリスト教思想から見た環境と経済」で、キリスト教思想において「環境と経済」をテーマ化した具体例として、カブを取り上げ、講義の問題設定を行った。

1. John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, and the Economy*, State University Press of New York Press, 2002.

Chapter Five. Nature, Community, and the Human Economy

Human Beings have always had an economy. ... In the contemporary world, the economy is imposed on the natural world in a particularly jarring fashion. It is far from natural!

The detachment from the natural world has been accompanied by breaking down natural relations among human beings as well. Human beings come to be in communities. In a profound sense the human communities in which they live create them. The economy of the modern world has broken down traditional communities. In its current global reach, this breakdown is being effected almost everywhere. (101)

The economic assumptions that guide global activity today are rooted in the dominant model of modernity. Of greatest importance are the individualistic view of human beings and the dualism of humanity and nature, with its resultant anthropocentrism. The modern economic model abstracts radically from human community and the interconnectedness of human life with other creatures.

Postmodernism sees matters quite differently. People are constituted by their internal relations to their bodies, to the wider world of nature, and especially to other people. Apart from these relations, they do not exist at all. They are formed and informed in human communities. It is in and through communities that they achieve true individuality and personhood. The model that describes this best is that of persons-in-community. In attenuated form, the community in question includes the natural environment. (121)

From the postmodernist point of view, nature in its full diversity, remarkable capabilities, and severe limitations must be taken very seriously. If there is to be a sustainable future, the complexity and interdependence of natural processes must be considered in ways that are discouraged by the modern economic model. The human economy is a subordinate element in the natural economy rather an autonomous system that can exploit the natural one indefinitely. We must find ways of meeting the real human needs of all and attaining a satisfying life that are far less consumptive than the lifestyles of the affluent today. (123)

2. John B. Cobb, Jr., Christianity, Economics, and Ecology, in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.

- ・現状：人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス。しかし、現実にはほとんど変化を生じていない。
- ・課題：科学技術は、経済とエコロジーを多様な仕方で関連づける
- ・古代キリスト教の徳の復興
 - 他者（地球に共に生きる生きた被造物すべて）の幸福のために自分を犠牲にする
 - 消費者志向社会からの撤退
 - すでに富裕である者は収入や財産の増加を進んで際し控えること。収入と富の再分配についての公共政策の支持。
- ・キリスト教共同体内での必要性：地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること
 - 神学の悔い改め：人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考える

ことによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情における、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復

- ・元来の意味に従って、経済とエコロジーとの連関を見直すこと：家全体（人間とその他者）の研究、この家を秩序づける規則、現実の経済活動がこの規則に合致すること。エコロジーの基盤に立って、経済理論を再考すること（現代経済学の成果の放棄ではなく）、これには前提におけるいくつかの深い転換が要求される
- ・経済的人間を共同体における人格として再考すること：共同体自体に起こっていることを真の経済発展の尺度とする。生産と消費の増大が共同体を崩壊させるとき、それは経済的に肯定できるものではない。
- ・経済的人間をその部分とする共同体は人間に限定できない、他の被造物と孤立しては繁栄できない、他の被造物の状態の改善は経済的利益である。
- ・共同体は未来へと広がっている。続く諸世代の幸福と他の種の未来の幸福は無視できない。
- ・共同体のメンバー（人間も非人間も）は他者に対する価値とそれ固有の価値とを持つ
- ・被造物の多様性は人間にとって重要な美的価値を増し加える。種の絶滅を避け、文化的多様性を保持する。
- ・科学技術をエコロジカルな仕方でも適切なものとする。人間の必要を満たすことの犠牲を最小化する技術の使用。
- ・神はすべての被造物に配慮している。苦痛を軽減し楽しみを豊かにするために働くことの重要性。

↓

3. 講義の問題設定

- ・環境と経済・政治とは一つの問題系を構成している。キリスト教思想研究は、問題系の再確認から議論を再構築する必要がある。そのための基礎理論としての自然神学の再考。倫理的設定では射程が狭い。
- ・キリスト教思想の根本へ、そこから議論を構築すること。つまり、聖書解釈が争点となる。

4. カブの議論の思想的基盤にはプロセス神学が存在する（下線部！）。今回は、このカブの背後にあるプロセス神学のポイントをホワイトヘッドに遡って解説する。

B. ホワイトヘッドとプロセス神学

1. ホワイトヘッド哲学へのアプローチ

* Alfred North Whitehead, 1861-1947：数学基礎論から科学哲学、そして形而上学へ

『数学原理』、『自然認識の諸原理』『自然という概念』『相対性原理』

Science and the Modern World, 1925

Religion in the Making, 1926

Process and Reality. An Essay in cosmology, 1929 (1969)

Adventures of Ideas, 1933

A Free Press Paperback

< Process and Reality >

Part I: The Speculative Scheme

I: Speculative Philosophy

II: The Categoreal Scheme

III: Some Derivative Notions

Part II: Discussions and Applications

Part III: The Theory of Prehension

<基本命題>

① Speculative Philosophy is the endeavour to frame a coherent, logical, necessary system of general ideas in terms of which every element of our experience can be interpreted. (5)

② The true method of discovery is like the flight of an aeroplane. It starts from the ground of particular observation; it makes a flight in the thin air of imaginative generalization; and it again lands for renewed observation rendered acute by rational interpretation. The reason for the success of this method of imaginative rationalization is that, when the method of difference fails, factors which are constantly present may yet be observed under the influence of imaginative thought.

(7)

<形而上学の方法＝一般化の方法>

(1) より高次の一般性へ（終わりなき前進とそのつどの定式化の試み）

経験の事実によって前提とされる一般的観念、自明性を越える

形而上学的志向性（全体へ、宗教と科学）

(2) 数学との対比、抽象化の問題（二つの誤謬）

(3) 一般化と経験への適応（検証）：合理主義と経験主義の統合

(4) 枠組みの構築と想像力、訓練された本能

(5) 知の体系性

2. ホワイトヘッドの形而上学の枠組み

2-1：プロセスとしての現実的存在

①現代科学の实在理解とその一般化

②一切の实在は相互作用連関の内にある

actual entity (the final real thing) / the 'principle of relativity'

③現実的存在の構造：現実態は両極的である

環境に限定される → 作用因、機械論的 → 自然的極

自らを形成する → 目的因、目的論的 → 精神的極

二つの極の総合＝合生 (concrecence)

④現実的存在の時間構造：時空的連続体としての現実的存在

過去（環境的過去）・自然的抱握／未来（主体的目的）・概念的抱握（新しさの創造）／

現在・合生

⑤現実的实在はプロセスである（自己創造を通じた世界創造）

・自己創造的プロセス・有機的プロセス（合成 concrecence）＝世界の形成過程への寄与
創造性 (Creativity)、神、永遠的客体 (eternal objects)

・生成から存在へ：現実的存在の三重の性格

1. 過去の世界によって与えられたという性格

抱握 (prehension)：客体に関心 (concern) を持つこと、感取 (feeling)

2. 因果的に限定されながら、ある目的観念を未来において実現するという性格

合生過程：自己原因的、主体

満足 (satisfaction)：主体的目的に実現

3. 後続する現実的存在に対して自らを客体的存在として与える

自らを超え出て自らを他者に与える：surperject（自己超越体）

因果的に客体化される、存在となる

1. 3 : 他との連関・連帯、2 : 個としての自由・自己原因

⑥感取と決断

- ・感取：情緒的トーン(the emotional tone)の客体から主体への移行（エネルギーの流れ）
 自然的抱握：単純な（自然的パターンの再演→連続性）／混成的な
 概念的抱握
 積極的／消極的
- ・合成過程：呼応的局面－順応的感取／補完的局面－概念的感取／満足－比較的感取
- ・最初の与件
 ↓遠近法：決断＝切り離し(cutting off)、超越的決断
 客体的与件 → 精神的極での統合過程、内在的決断

⑦主体的目的(the subjective aim)：強制力として作用するのではなく、促し・誘因となる

- ユニークで決定的な機能を伴った感取。個別性を可能になる
 概念的諸感取の主体的諸形式を決定する、満足の統一を求める、
 プロセス全体に目的論的統一を与える

2-2 : 現実的存在の系列・社会

(1) 持続とエポック的時間

1. 現実的存在は持続において、その同時的世界を開く
2. 過去から現在、現在から未来への移行が、自然界の連続性を基礎づける
 Aは「今、ここ」(Aにとっての場所)で、他のもろもろの現実的存在を抱握する。
 ・過去のものの現在への内在 ・現在から未来への移行
3. エポック的時間：持続は計測される時間ではなく、生きられた時間
 個体性が実現されると、それを自己を超えて客体化される。
 同時的世界におけるもろもろの現実的存在は相互に因果的に独立。そこに自由がある。

(2) 系列と社会、秩序、永遠的客体

1. 現実の重層構造
2. 現実の種類(タイプ)：無機的／植物／動物／人間(126-128) → 次元論への展開
 ↓
 諸機会のグループ化(grouping of occasions)：nexus(系列)、society(社会)
3. 系列：相互内在性(mutual immanence)
 空間的系列：諸機会が相互に、同時に(因果的独立性という対称的關係において)、
 グループ化される幾組かを含む場合
 時間的系列：それらが時間的な前後関係において、継起的にグループ化される場合
 時空的系列：動物の身体
4. 社会：あるタイプの社会的秩序を例示あるいは分与している系列
 ・構造をもった社会(structured society)
 ・粒子的社会(corpuscular society)
 ・継起的秩序を有する人格的社会(personal society)
5. 諸社会の重層的構造
 電磁的諸機会の社会(電子や陽子などの電磁的諸機会で作成される)／
 幾何学的社会／四次元的な時空連続体／外延的連続体(extensive continuum)
6. 永遠的客体化：個的本質と関係の本質(他のすべての永遠的客体と内的に連関)

(3) 外延的連続体：世界の創造的前進の根底に横たわっている

1. 無限な分割可能性(indefinite divisibility)と無際限な延長(unbounded extension)

2. 現実的存在が外延的連続体を原子化する、この原子化が時間化。
3. 共通世界の連帯性
4. 宇宙波動方程式によって記述され、その都度の観測（現実的存在の生成）において、時空化する確率的可能的存在
 - 量子の波動性（波動法的式によって記述される確率的存在）
 - 観測によって粒子的に見いだされる（波束の収束）
5. 宇宙の連帯性の基礎としての外延的連続体
6. システム論の展開

<外延的連続体・コメント>

- ・宇宙波動方程式によって記述され、その都度の観測（現実的存在の生成）において、時空化する。確率的可能的存在。
- ・宇宙の連帯性の基礎としての外延的連続体
- ・システム論：系列－社会

3. ホワイトヘッドと宗教

(1) 宇宙論的構図（目的論的な世界の創造過程）

自然科学から一般化→形而上学

この枠組み内に、宗教はいかに位置づけられるのか

創造性／神／永遠的客体／外延的連続体

目的因／作用因／形相因／質料因

プラトンの『ティマイオス』における「神」

(2) 神の本性の三重性

1. 神も一つの現実的存在である

In the first place, God is not to be treated as an exception to all metaphysical principle, involved to save their collapse. He is their chief exemplification. (405)

2. 神の本性の三つのアスペクト（一つの現実的存在としての全体的な神の、相互に独立で関連した仕方）：原初的本性、結果的本性、自己超越的本性

原初の本性：概念的抱握

結果的本性：自然的抱握

三重の本性：神は世界に依存し、世界から独立であり、世界に働きかける

①原初の本性（「神から世界へ」1－働きかけ・誘因）

3. 永遠的諸客体とそれを現実化する現実的存在との関係性

永遠的客体と外延的連続体から時空的連続体・現実的存在の社会の形成という観点での神の役割、形相によって質料を限定し、現実の世界を構築する

4. 永遠的諸客体の相互の関連性

神による永遠的諸客体の非時間的評価が、時間的世界の経過に先立って非派生的になされる

5. 最初の主体的目的を供給、説得的誘因 (persuasive lure)

現実的存在の合生過程を導いてゆくのが、神の原初の本性から直接導き出される主体的目的、理想的な完全性の実現への衝動

6. 外延的連続体の諸現実的存在による原子化が、時空的連続体に結果する。

外延的連続体の原子化、選択的制限は神の決断にもとづく

②結果的本性（「世界から神へ」）

展開する宇宙の諸現実的存在の神による自然的抱握

神の本性は世界の創造的前進の結果としてある。

神による世界の自然的抱握は選択的であり、あるものは消極的抱握を通して神から排除される（＝神の審判）

③自己超越的本性（「神から世界へ」 2－世界への内在）

神が自らを後続する現実的存在に与件として与えること

ホワイトヘッドの神の特徴

↓

(3) 神と世界の逆対応

神と世界の逆対応ともいうべき力動的な関係

神に関しては原初的本性が優先、他の現実的存在の場合は過去によって与えられたという性格から出発

神は能動から受動へ、世界は受動から能動へ展開する

(4) 万有在神論（ハーツホーン）

神は永遠的恒常的であるとともに時間的流転的、世界超越的であるとともに世界内在的、世界に含まれるとともに世界を含む、人格的存在者である

It is as true to say that God is permanent and the World fluent, as that the World is permanent and God is fluent.

It is as true to say that God is one and the World many, as that the World is one and God many.

It is as true to say that the World is immanent in God, as that God is immanent in the World.

It is as true to say that God transcends the World, as that the World transcends God.

It is as true to say that God creates the World, as that the World creates God. (410)

(5) コメント

- ・三位一体論との関わり、なぜ神は人格的でなければならないのか？

哲学者の神：形而上学的な神論

科学と神的原理との関連性は議論できているが、しかし、それは宗教的神あるいは神学とどのような連関にあるのか

- ・キリスト教、ギリシャ、仏教などの諸思想との関わり

4. プロセス神学とキリスト教思想

(1) ホワイトヘッドの神論とその意味 → キリスト教と自然科学、キリスト教と仏教

- ・神の本性の三重性：cf. 無からの創造、三位一体、人格性

1. 神も一つの現実的存在である

2. 神の本性の三つのアスペクト：原初的本性、結果的本性、自己超越的本性

- ・神と世界の逆対応：cf. 予定と自由意志

3. 神と世界の逆対応ともいうべき力動的な関係

神に関しては原初的本性が優先、他の現実的存在の場合は過去によって与えられたという性格から出発

4. 神は能動から受動へ、世界は受動から能動へ展開する

- ・万有在神論：cf. 超越と内在、有神論と汎神論

5. 神は永遠的恒常的であるとともに時間的流転的、世界超越的であるとともに世界内在的、世界に含まれるとともに世界を含む、人格的存在者である

(2) キリスト教思想についての意義－プロセス神学－

1. 存在論とキリスト教思想

有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』創文社。

大林 浩 『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局。

2. プロセス神学：ホワイトヘッド形而上学の概念枠によるキリスト教思想の構築

Charles Hartshorne(1897-2000), John B. Cobb, David Ray Griffin, Lewis Ford

①ホワイトヘッドの神 → 宗教の神へ ②「科学と宗教」→ 新しい有神論の定式化

3. Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967

(Ch.ハーツホーン『自然神学の可能性』行路社。)

①神概念の規定

②礼拝の対象としての神

③アンセルムスの神概念：これ以上大きなものが考えられないあるもの

④ホワイトヘッド哲学に基づく新しい自然神学

⑤宗教と科学との統一性

⑥ギリシャの実体形而上学の不適切さを超えて

(3) プロセス神学の意義

A forest is the triumph of the organisation of mutually dependent species.

Every organism requires an environment of friends, partly to shield it from violent changes, and partly to supply it with its wants. The Gospel of Force is incompatible with a social life. By force, I mean antagonism in its most general sense.

Almost equally dangerous is the Gospel of Uniformity. The differences between the nations and races of mankind are required to preserve the conditions under which higher development is possible. (Whitehead, 1925, 206-207)

<参考文献>

1. 山本誠作『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社。

2. 田中裕『ホワイトヘッド 有機体の哲学』講談社。

3. 栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社。

4. 宮平望『現代アメリカ神学思想 平和・人権・環境の理念』新教出版社。

5. John B. Cobb, Jr. and David Ray Griffin, *Process Theology. An Introductory Exposition*, Westminster John Knox Press, 1976.

6. John B. Cobb Jr., *Process Theology as Political Theology*, Manchester University Press / The Westminster Press, 1982.